

養成講座ストーリー 第2弾

「事例から見える訪問看護師の包括的な支援力」

WAM 助成事業で実際に訪問支援を行った経験

事例報告の事例に共通していたのは、支援開始時点では、本人とのコミュニケーションが難しかったり、家庭内で強いストレスや困難を抱えていたり、医療や学校とのつながりが途切れていたりするなど、既存の支援機関だけでは対応が難しい状況にあったことです。

訪問看護師は、最初から「学校へ行くこと」や「問題行動を改善すること」を目標とするのではなく、本人の興味・関心に寄り添い、遊びや会話などを通して安心できる関係をつくることから支援を始めました。

その結果、

- ・好きな動画やアニメ、カードゲームなどをきっかけに会話が生まれた
- ・「訪問が楽しみ」と本人が感じられる関係につながった
- ・自分から学校や人間関係について話せるようになった
- ・「人との関わりがストレスになる」など、自分自身の状態を理解できるようになった
- ・散歩やお菓子作りなど、自分に合ったセルフケアを見つけられた
- ・母親の困り感や心理的負担にも寄り添うことができた
- ・中断していた医療機関への再接続につながった

など、本人と家族双方に変化が生まれました。

また、本人と母親をそれぞれ個別に支援する2名体制や、スタッフを固定する工夫、訪問時間を本人の生活リズムに合わせる工夫など、「支援する側の都合ではなく、本人が安心して支援を受けられる環境をつくる」ことの重要性も明らかになりました。

現場で見えてきた課題

事例から見えてきた課題は、単に「不登校の子どもへの支援が不足している」ということではありません。

むしろ、支援につながるまでの段階に大きな壁があることが明らかになりました。

本人には、発達特性、感覚過敏、人間関係へのストレス、生活リズムの乱れ、精神的な不調などが複合的に存在していました。また、家族側にも、本人への対応方法が分からない、家族内で認識が異なる、保護者自身が疲弊している、他の家族の支援や仕事を抱えているなど、さまざまな困難が重なっていました。

そのため、「学校に行けない」という表面的な問題だけを見ていては、本人が

抱えている本当の困難にたどり着けないという課題があります。

さらに、本人や家族が自ら相談機関へ出向くことが難しいケースでは、相談を待つだけでは支援が届きません。今回の事例では、訪問看護師が家庭に入り、本人の生活環境や家族関係を直接見ながら支援したことで、初めて把握できた課題が多くありました。

また、医療機関とのつながりが途切れているケースでは、単純に「受診してください」と伝えるだけでは再接続できません。本人の拒否感を軽減するために説明方法を工夫し、同行するなど、医療につなぐための橋渡しそのものが支援として必要でした。

このことから、現場では次のような課題が見えてきたと整理できます。

- ① 支援を求めることができない家庭に、どう支援を届けるか
 - ② 不登校の背景にある発達特性・精神的不調・家族の困難を、誰が把握するのか
 - ③ 本人と保護者を別々の視点から支援できる体制をどうつくるか
 - ④ 学校・家庭・医療・福祉をつなぐ橋渡し役をどう確保するか
 - ⑤ 一時的な支援で終わらせず、事業終了後も継続して支援できる仕組みをどうつくるか
- という課題です。

訪問看護師に必要な専門性

1. 「問題行動」ではなく、その背景を理解する専門性

不登校、昼夜逆転、離席、奇声、家庭内での破壊行動など、表面に現れている行動だけを問題として捉えるのではなく、その背景にある本人の不安、ストレス、発達特性、人間関係、家庭環境などを多面的にアセスメントする力が必要です。

2. 本人の「好き・得意」から関係をつくる専門性

支援の入口は、必ずしも医療や病気の話である必要はありません。動画、アニメ、カードゲームなど、本人が興味を持っていることを手掛かりにして、「この人なら話してもいい」と思える関係をつくることが重要です。今回の事例では、医療者という立場を前面に出すのではなく、本人にとって身近な「お姉さんのような存在」になることが、信頼関係の形成につながりました。

3. 本人のペースに合わせて支援を調整する専門性

訪問時間を生活リズムに合わせたり、担当スタッフを固定したり、本人と母親を別々に支援したりするなど、既存の支援方法を本人に合わせて柔軟に変える力が求められます。「支援を受けてもらう」のではなく、本人が安心して支援を受けられるように支援そのものを調整することが重要です。

4. 家族を「支援の対象」として捉える専門性

不登校支援では本人への支援に目が向きがちですが、今回の事例では、母親が強いストレスを抱えていたり、本人への対応を一人で背負っていたりする状況がありました。本人だけを変えようとするのではなく、保護者の思いを聴き、本人の行動の背景を伝え、家族が少し楽に関われるよう支援する力も必要です。

5. 本人の自己理解とセルフケアを育てる専門性

「人との関わりがストレスの引き金になる」と本人自身が気づいた事例のように、支援者が答えを与えるのではなく、本人が自分の状態を理解し、自分に合った対処方法を見つけられるよう支援することが重要です。これは、将来的な自立や再発予防にもつながる専門性です。

6. 医療と生活をつなぐ専門性

訪問看護師は医療職でありながら、病院の中だけでは見えない「生活の場」に関わることができます。今回も、医療機関への受診が中断していた本人に対して、本人が受け入れやすい形で受診を提案し、同行することで医療との再接続につなげました。医療知識を生活の中で活用し、必要な医療につなぐ橋渡し役としての専門性が重要です。

7. 多職種・多機関をつなぐコーディネート力

不登校の背景には、学校、家庭、医療、福祉、発達支援など複数の領域が関係します。そのため、訪問看護師自身がすべてを抱えるのではなく、必要な時に学校や医療機関、福祉サービスなどにつなぎ、本人を中心とした支援ネットワークをつくる力が必要です。

養成講座を開催する大きな目的

今回の事例を通して見えてきたのは、不登校支援には、医療的な知識や看護技術だけではなく、本人の気持ちや行動の背景を理解する力、信頼関係を築く力、家族を支える力、そして学校・医療・福祉をつなぐ力など、幅広い専門性が必要だということです。

だからこそ、これらの専門性を一人ひとりの経験だけに委ねるのではなく、訪問看護師が体系的に学び、実践につなげられる機会が必要です。

その学びの場として、今回「訪問看護師のための不登校支援スキルアップ養成講座」を始めます。

不登校の子どもと家族に、より適切な支援を届けられる訪問看護師を地域に増やしていくこと。

それが、この養成講座を開催する大きな目的です。



① WAM助成事業で実際に訪問支援を行った経験

支援開始時の状況（共通していたこと）

- 本人とのコミュニケーションが難しい
 - 家庭内で強いストレスや困難を抱えている
 - 医療や学校とのつながりが途切れている など
- 既存の支援機関だけでは対応が難しい状況でした。



訪問看護師の支援の始め方

最初から「学校へ行くこと」や「問題行動を改善すること」を目標とするのではなく、本人の興味・関心に寄り添い、遊びや会話を通して安心できる関係をつくることから支援を始めました。



訪問支援の結果、本人と家族双方に変化が生まれました



支援する側の工夫も重要でした

- 本人と母親をそれぞれ個別に支援する体制
- スタッフを固定する工夫
- 訪問時間を本人の生活リズムに合わせる工夫
- 支援する側の都合ではなく、本人が安心して支援を受けられる環境をつくるのが大切

② 現場で見えてきた課題

支援につながるまでに大きな壁がある
本人には総合的な困難があり、家族側にもさまざまな困難が重なっていました。



相談を待つだけでは支援が届かないケースがある
本人や家族が自ら相談機関へ出向くことが難しい場合、訪問看護師が家庭に入り、生活環境や家族関係を直接見ながら支援することで、初めて把握できた課題が多くありました。



医療機関との再接続には「橋渡し」が必要
つながりが途切れているケースでは、「受診してください」と伝えるだけでは再接続できません。本人の拒否感を軽減する工夫や同行など、医療につながるための橋渡しそのものが支援として必要でした。



現場で見えてきた主な課題

- 1 支援を求めることができない家庭に、どう支援を届けるか
- 2 不登校の背景にある発達特性・精神的な調子、家族の困難を、誰が把握するのか
- 3 本人と保護者を別々の視点から支援できる体制をどうつくるか
- 4 学校・家庭・医療・福祉をつなぐ橋渡し役をどう確保するか
- 5 一時的な支援で終わらず、事業終了後も継続して支援できる仕組みをどうつくるか

本人と家族の声に寄り添い、必要な支援を必要な人に届けるために、これらの課題を一つひとつ解決していくことが求められています。

訪問看護師のための

不登校支援スキルアップ養成講座（全6回）

子どもと家族に寄り添う力を、実践につなげる学びの時間

第1回 『不登校現象』の理解

9月27日（日） ～子どもたちに今、何が起きているのかを多面的に理解する～



第2回 不登校児への支援のための基礎講座

10月18日（日） ～信頼関係づくりから始まる訪問支援の基本を学ぶ～



第3回 家族支援の意味合いと具体的支援

11月23日（月・祭日） ～子どもの変化を支える家族へのアプローチを学ぶ～



第4回 不登校児への早期支援の必要性

12月26日（土） ～長期化・重症化を防ぐためのアウトリーチ支援を考える～



第5回 多機関連携と社会資源活用

1月31日（日） ～学校・医療・福祉・地域がつながる支援ネットワークを構築する～



第6回 訪問看護支援のリフレクション

2月21日（日） ～実践を振り返り、支援力を高めるための学びを共有する～



ともに学び、つながり、支え合うことで、子どもたちの未来をひらきましょう。